

Title	中国老解放区の体育とスポーツ
Sub Title	Pysical education and sports in China under administration of Chinese communist party (1931-1945)
Author	笹島, 恒輔(Sasajima, Kosuke)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1986
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.26, No.1 (1986. 12) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00260001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国老解放区の体育とスポーツ

笹 島 恒 輔*

1. は じ め
2. 旧 解 放 区
3. 中華ソビエト共和国期
4. 陝北ソビエト区期
5. 日 中 戦 争 期
6. む す び

1. は じ め

1921年7月に結成された中国共産党は1923年6月の中国共産党二全大会で中国国民党との提携が決定され、これに応じて中国国民党も1924年1月の国民党一全大会で連ソ容共の方針を決定し両者の間に第一次国共合作が成立した。

国民党は1926年7月に中国統一のための北伐を開始した。北伐の途次の1927年4月12日に蔣介石は上海クーデターを断行し共産党を弾圧した。これにより第1次国共合作は互解した。

中国共産党は1931年11月に江西省瑞金に中華ソビエト共和国臨時政府を樹立した。この中華ソビエト共和国臨時政府の発展は蔣介石に脅威を感じさせた。そこで蔣介石は1930年11月から数次にわたりソビエト区に対する攻撃を行なった。33年10月から開始された第5次攻撃をもちこたえられず34年11月に瑞金は陥落した。共産党は西方への移動を行ない8つの省を通して1935年10月に陝西省北部に達し延安を新首都と定めた。

国民党は共産党攻撃の方針はかえなかったが、1936年12月12日陝西省西安において張学良が蔣介石を監禁した西安事件が起こり、その結果第2次国共合作が成立した。

1937年7月に日中戦争が起こり、日本軍の攻撃により国民党軍が後退し生じた空白地帯に共産党が進出しその勢力を発展させていった。

共産党勢力の発展は蔣介石に非常な不安をあたえた。蔣介石は共産党との統一戦線を維持しつつしばしば反共作戦を展開してゆき、1941年1月には安徽省南部の新四軍司令部を急襲して全滅的打撃をあたえた「新四軍事件」を起こし、1943年5月頃から国民党軍をもって陝北地区

* 慶應義塾大学体育研究所教授

中国老解放区の体育とスポーツ

を包囲し太平洋戦争終結までその包囲態勢をとかなかった。また、1941年に開始された日本軍の抗日根拠地に対する激烈な攻撃と相まって国共関係を悪化させた。

この様な状況下でありながら共産党はその支配地区を拡大し発展していった。

本論文はこれらの中国共産党の統治下にあった地域の体育・スポーツについて論じるものである。

- 注 (1) 1920年コミンテルン極東局長ヴォイチンスキーが中国を訪ね、これをきっかけとして陳独秀、李大劉等によって結党準備が進められ、1921年7月上海で中国共産党が設立された。
- (2) 1933年10月から開始された国民党の第5次攻撃を支えることが出来ず、1934年11月には瑞金は陥落し、共産党軍は西方へ移動することになった。共産党軍の主力は10月中旬から行動を起こし、広東、湖南、広西、貴州、雲南、西康、四川、甘粛の各省を踏破し、他の共産軍と共に1935年10月陝西省北部に到達した。「二万五千里」（中国里の1里は600米）とよばれるものがこれである。
- (3) 1936年12月12日に陝西省西安で張学良が蔣介石を監禁した事件で双十二事件ともいわれる。当時国民党は反共戦を行っており、張学良は西安において共産軍の討伐を命ぜられていたがこれを行なわなかったため、説得のために西安に赴いた蔣介石を監禁した事件。周恩来の調停で蔣介石は釈放されたが、この結果第2次国共合作が成立した。
- (4) 新四軍は共産党の長征の際に江南各地に残留した部隊を1937年10月に改編した部隊。新四軍の作戦行動地域は日本軍と国民政府軍により腹背からの攻撃を受けていた。1941年1月7日に国民政府の命によって移動中の新四軍を国民党の顧祝同軍が安徽省南部で攻撃し、軍長が捕えられ、副軍長は戦死し、将兵約9,000が戦死した事件。皖（安徽省）南事変ともいう。

2. 旧 解 放 区

旧解放区とは1945年8月以前に中国共産党の支配下にあった地域をいう。

1927年7月第1次国共合作は解消し、中国共産党はコミンテルンの指示にもとづいて新情勢に対処して都市および農村における武装暴動政策の採用と土地革命の実行とを決定し、8月1日賀竜・葉挺らの軍隊によって起こされた南昌暴動、同軍の南征と潮州、汕頭の占領、湖南、湖北、広東、江西の四省を中心に秋の収穫時の階級闘争の激化をねらって行なわれた四省秋収暴動などはその主なものであった。これらは、11月広東省海陸豊ソビエトの樹立に成功しただけでその他はすべて失敗に終わってしまった。この時期の革命運動はいずれも失敗に終わったが、暴動失敗後江西省井崗山に集結した残存部隊は毛沢東と朱徳の指導のもとに農村に革命根拠地と紅軍とを建設し、土地革命を実行することによってしだいにソビエト運動を発展させていった。当時毛沢東の指導する農村ソビエトの建設は湖南、湖北、江西の諸省を中心に著しい発展を示し、1930年初頭には13軍約6万の紅軍と9地区のソビエトが建設され、5月には上海で全国ソビエト区域代表大会が開かれた。

中国共産党の実権を握っていた宣伝部長李立三は革命情勢を過大に評価し主要都市における

武装蜂起を主張した。この武装蜂起は失敗に終り、李立三コースが清算され、1931年11月7日江西省瑞金で中華ソビエト第1次全国代表大会を開き、憲法、労働法、土地法、政府委員選挙法などを採択するとともに毛沢東を主席とする中華ソビエト共和国臨時政府を樹立した。

ソビエト区の発展は蒋介石に重大な脅威を感じさせた。そこで彼はソビエト区に対する攻撃を決意し、1930年11月から1934年11月まで5回にわたる攻撃を行なった。紅軍はその都度攻撃を撃退することに成功したが、33年10月から開始された第5次攻撃はこれを支えることができず、34年11月に瑞金はついに陥落し、紅軍は西方に移動することになった。主力である朱徳、毛沢東軍は10月中旬から行動を起こし、広東、湖南、広西、貴州、雲南、西康、四川、甘粛の各省を踏破し、その他の紅軍とともに35年10月に陝西省北部に達し新首都を定めた。

国民党は共産党攻撃の方針はかえなかったが、1936年12月12日に剿匪副司令張学良および楊虎城が西安滞在中の蒋介石を監禁して内戦の停止と共同抗日の実行とを要求した「西安事件」が勃発し、蒋介石は中国共産党代表周恩来の調停で釈放されこの要求を受諾した。1937年7月7日に日中戦争が起こると国共合作にもとづく抗日民族統一戦線の結成をみることになった。8月25日に共産党中央が洛川会議で決定した「抗日救国十大綱領」は抗日戦争に対する共産党⁽⁵⁾の立場を明示したものであった。

共産党勢力の発展は蒋介石に非常な不安をあたえた。蒋介石は1938年10月の武漢陥落以後統一戦線を維持しつつしばしば反共作戦を展開していたが、1941年1月ついに顧祝同軍をして安徽省南部の新四軍司令部を急襲させ、これに全滅的打撃をあたえるにいたった。「新四軍事件」といわれるものがこれであるが、さらに蔣は、1943年5月のコミンテルン解散前後から胡宗南軍を主力とする国民党軍をもって陝北（陝西省北部）地区を包囲し、太平洋戦争終了までその包囲態勢をとかなかった。

国民党のこの動きは1941年に開始された日本軍の抗日根拠地に対する激烈な攻撃と相まって国共関係を悪化させ共産党に重大な損害をあたえた。共産党は困難を乗り越えて党の強化発展と拡大に努めたので太平洋戦争の終結した1945年8月には党員121万、正規軍90万、民兵250万を算し、大小辺区政府18を数えるまでに発展した。⁽⁶⁾

本論文においては解放区という呼称を使用しているが、西安事件による第2次国共合作の成立により従来はソビエト区と呼ばれていた中国共産党支配地区は辺区と呼ばれるようになり、その政権は辺区政府といわれた。日中戦争が始まると紅軍は国民革命軍八路軍に編成されて華北に出動し、続いて華中にも共産党の手で新四軍が編成された。これらの共産党軍は日本軍の占領した地区の農村に深くはいつてその地方の民衆を組織して日本の支配に服さない政権をうちたてた。これらの政権も正式には辺区政府と呼ばれ、その統治した地区は辺区と呼ばれたが、同時に日本軍の支配から解放された地区という意味で解放区と呼ばれるようになった。

中国老解放区の体育とスポーツ

国共内戦により共産党の支配する地区は増大したが、これらの地区を一般に新解放区と呼び、抗日戦争時代から解放区であった地区を老解放区と呼ぶようになった。

老解放区は19の地区に分かれ19の省が含まれているが、その主なものは陝北ソビエト区からかわった陝甘寧（陝西，甘肅，寧夏），華北の晋察冀（山西，察哈爾，河北），魯予皖（山東，河南，安徽），晋冀予（山西，河北，河南），華中の蘇皖（江蘇，安徽）の各解放区である。小さな解放区は国民党軍と日本軍の攻撃にたえずさらされていた。

注 (5) 1937年8月25日の中国共産党中央政治局の拡大会議で採択された。それは、1. 日本帝国主義の打倒。2. 軍事の全国的総動員。3. 人民の全国的総動員。4. 政治機構の改革。5. 抗日の外交政策。6. 戦時の財政経済政策。7. 人民の生活の改善。8. 抗日の教育政策。9. 民族裏切り者，売国奴，親日派を一掃し後方をかためる。10. 抗日の団結。の10項目。

(6) 石川忠雄著「中国共産党史研究」(昭和34年)，慶應通信，12～15頁。

3. 中華ソビエト共和国期

I ソビエト区の教育

中国においては1928年に「戊辰学則」が公布され，各教科の課程標準も公布され学校制度も整い，学校数も増加し就学率も高まっていったが，小学校の就学率は1930年に全国平均で百分之二十であり，江西省で百分之七，湖北省で百分之五で，経済的に貧しい省は小学校教育も貧弱であった。⁽⁷⁾

当時の中国の就学率は一般には大都市の周辺で高く，農村では低かった。中国共産党が重点をおいていたのは農村であったので，ソビエト区の就学率はかなり低いものであったであろう。

1931年11月に成立した中華ソビエト共和国臨時政府は1931年11月に中華ソビエト共和国第一次全国工農兵代表大会を開催し，宣言が行なわれたが，その宣言の中に教育に関するものがあった。それは，

丙. 工農労働者は，男女を問わず社会，経済，政治と教育上において完全に同等の権利と義務を享有する。

丁. 一切の工農労働者と，その子弟は国家の免費教育の権利を享受する。教育事業の権限はソビエトが掌管し，一切の麻醉人民的，封建的，宗教的と国民党の三民主義的教育を取消す。

庚. ソビエト政権下においては各種の宗教団体の特別権利を取り消す。……政権組織，教育機関と宗教事業は絶対に分離する。但し，人民は宗教を信仰すること，或いは宗教に反対

する自由を有する。⁽⁸⁾

というものである。

この宣言によりソビエト区の各郷に労働小学校が設けられていった。この労働小学校は後にレーニン小学校と改称された。

1933年10月10日に「目前教育工作的任務的決議案」を決定し、1934年2月16日に「中華ソビエト共和国小学制度暫行条件」1934年4月に「小学課程教則大綱」を公布した。

「中華ソビエト共和国小学制度暫行条例」によると、小学校は前期3年、後期2年の5年とし、8歳から12歳を学齢とするが、失学者については15歳とする。授業時数は前期の3学年が週18時間、後期は1年（4年）が24時間、2年（5年）が26時間、他に前、後期とも校外教育と校外作業を小なくとも週に12時間。

教科内容は、前期3年が国語、算術、遊戯（唱歌、運動、手工、図画）、国語の中に郷土の地理、革命の歴史、自然と政治を含むとしており、後期2年は国語、算術、遊戯、科学、政治となっている。⁽¹⁰⁾

「小学課程教則大綱」によると前期3年を初級レーニン小学校、後期3年を高級レーニン小学校としており、学年は8月20日に始まり、7月20日に終るとしている。

各教科の毎週の授業時数は、

初級小学校

国語6時間、算術4時間、遊戯8時間、労働実習6時間、社会活動6時間。

高級小学校

国語6時間、算術6時間、遊芸8時間、社会常識4年2時間、5年3時間、科学常識4年2時間、5年3時間、労働実習6～8時間、社会活動6～10時間。

となっていた。⁽¹¹⁾

中等教育については「短期職業中学試辦章程」により13歳～16歳を学齢とする4年（当分は1～2年の短期）の職業中学を、また「女子職業学校暫行簡章」によって16歳～25歳を入学年齢とする2年の学校を設けるとしている。⁽¹²⁾

中華ソビエト共和国臨時政府は文旨の追放、失学者の救済を教育の第一目標としていたもので、そのおかれていた状況からして中等教育をどこまで実施にうつしていたかは疑問のもたれるところである。

師範教育については失学者教育の教員を養成するために力を入れざるをえなかったが、いずれも速成教育の域を出なかった。

1932年10月に設立された中央レーニン師範学校の年限は3カ月～6カ月であり、国文、算術、歴史、地理、政治、図画、唱歌、生理、体操、遊戯、労作等を教科としていた。⁽¹³⁾

1934年3月～4月に「高級師範学校簡章」,「初級師範学校簡章」,「短期師範学校簡章」が公布されている。これによると,高級師範学校は修業年限は1年(6ヵ月より短かくてはいけない)で,初級と短期師範学校の教員養成を目的とし,初級師範学校と短期師範学校は小学校教員養成を目的とし,修学期間は初級師範学校は6ヵ月を標準とするが最低3ヵ月まで短縮出来るとしており,短期師範学校は3ヵ月を標準とするが2ヵ月に短縮出来るとしている。

入学資格は,高級師範学校は普通の文献を良く読める者(女子は識字の程度を限定せず,予科を設けて教育する),初級師範学校は普通の文献を良く読める者(女子は文化程度を制限しない),短期師範学校は小学校の前期3年の教科書全部を良く理解出来る者(女子は文化程度を制限しない)となっていた。⁽¹⁴⁾

これらの規定からみてもその教科の程度,入学生の学力も低いものであったであろう。中華ソビエト共和国臨時政府の統治した地域は文化水準の低い地域であり,当時の紅軍の兵士の大多数は文盲で文化水準も低かった⁽¹⁵⁾ので師範教育もこの程度にならざるをえなかった⁽¹⁶⁾のであろう。

II 学 校 体 育

中華ソビエト共和国臨時政府の統治する地域は国民政府軍の包囲下にあり物資は欠乏をしていた。当時の状況について「老解放区教育簡史」には,「当時の革命根拠地の環境は苦難にみちており,物資の条件も困難であった。レーニン小学校は勤儉,難苦勉学の精神を発揮し,種々の困難を克服して開校を続けた。校舎は多くの場合旧祠堂(祠堂は先祖,賢者を祭ったところ),廟(神社仏閣にあたる),大きい家の中庭に設けられ,机と椅子は民家の食卓と細長い椅子を借用し,或いは神前の机を利用していた。白墨も筆紙墨もなかったので,山から石膏を採って来て白墨の代用とし,紅い色の土を粉にして水を加えて朱墨の代用に使っていた。紙も筆記具もないので教師は児童に砂を入れた箱で字を習わせ,或いは木の枝で地上に字を書かせていた。その他に種々の革命的辦法をこうじて物資上の一切の困難を克服してレーニン小学校は開校を続け発展をしていった。」とある。⁽¹⁷⁾

小学校がこの様な状況下において授業を行なっていたので,体育の授業においても施設,用具を使用しないで済む教科内容にせざるをえなかった。

1933年10月に公布された「小学課程与教則草案」によると,

運 動

1年一一般の児童の心理は正式の体操を喜ばなくて,枝の上,球の上,ブランコの上でとびはねるのを喜び,山登り,跳躍,競走,石投げ,競争遊戯,表情をあらわす遊戯を好むので1年においてはこれらの運動を主として実施する。普通の体操は意味がないが,体操は身体を平

中国老解放区の体育とスポーツ

均的に発育させるものなので、毎回9分間だけ練習させる。その外、規律運動については児童に運動は苦痛であるという感覚を持たせないために簡単に教える必要がある。人員報告についても20人以上になるとはっきりしない。これは20以上について算術で学んでいないからである。初年級の児童の筋肉は十分な訓練をしていないので正確な動作を行なうことは困難である。気をつけ、休めもきちんと行なえないので、規律運動は簡単にやるべきである。

2年一大部分は1年と同じであるが、教練と体操を逐次増加していく、教練が主要な位置を占める。

3年一1. 正常歩と駆け足を練習する、隊形変換を学習し、教練の比重を増加する。2. 器械体操は2年と同じ、体操には複雑なのを加えていく。3. 遊戯と体操について注意することは2学年と同様である。

4年一3学年と同様であるが教練を重視する。⁽¹⁸⁾
となっている。

この「小学課程与教則草案」には5年については何も定めていない。1934年の「中華ソビエト共和国小学校制度暫行条例」で5年と定めているので、それ以前においては4年であったのかもしれない。なお、「小学課程教則大綱」から運動が体育となっている。

中等教育課程には体育はなく、師範学校は速成教育であり小学校で教える必要のあることのみについて教えていたと考えられる。

Ⅲ ス ポ ー ツ

学校の用具さえ十分になかった中華ソビエト共和国臨時政府の治下においてはスポーツ用具が潤沢であったとはとうてい考えられない。若し入手することが出来たとしても限られたものであったであろう。スポーツをすとなれば用具を必要としない種目ということになるわけであろう。

国民党軍の包囲下にあったために軍事体育が重視されておりそれに関連のある陸上競技が盛んに行なわれていた。ソビエト区においては身体鍛練のためにスポーツが奨励されていた。実施されていた種目は用具を必要としない体操、水泳、陸上競技、登山、ブランコで他にサッカー、バスケットボール、卓球、乗馬等が行なわれていた。⁽¹⁹⁾

長征の途中紅軍は獣皮に干草をつめたバスケットボールのボールを使用していたので、用具の不足していたソビエト区でも一部ではこの種のボールを使用して球技を行っていたのではないと思われる。⁽²⁰⁾

ソビエト区においては、5月1日（メーデー）、7月1日（中国共産党創立記念日）、8月1日（建軍節）、10月10日（辛亥革命）、5月30日（5・30事件）、9月18日（満州事変）等の祝日や記念日に

は集会を開き、その集会の後でスポーツ大会を開催していた。競技種目は陸上競技、球技と軍事種目であった。

ソビエト区において最初行なわれた競技会は1933年5月30日に举行された中華ソビエト共和国第一次運動大会である。

- 注 (7) 國聯教育考察團著「中國教育之改進」(民国21年—1932年), 国立編訳館, 71~72頁。
(8) 中央教育科学研究所編「老解放区教育資料(一)」(1981年) 教育科学出版社, 27頁。
(9) 前掲(8)書, 28頁。
(10) 前掲(8)書, 308~311頁。
(11) 前掲(8)書, 311~319頁。
(12) 前掲(8)書, 236~238頁。
(13) 劉問岫著「中国師範教育簡史」(1984年) 人民教育出版社, 92~93頁。
(14) 前掲(8)書, 239~242頁。
(15) 陳元暉著「中国現代教育史」(1979年) 人民教育出版社, 114頁。
(16) 陳元暉編「老解放区教育簡史」(1982年) 教育科学出版社。
(17) 前掲(16)書, 43頁。
(18) 前掲(8)・, 297~307頁。
(19) 成都体育学院体育史研究室編著「中国近代体育史簡編」(1981年) 人民体育出版社, 150頁。
(20) 前掲(19)書, 150~153頁。

4. 陝北ソビエト区期

1934年11月に瑞金を放棄して移動を開始した時の紅軍は約10万人であったが、移動中にたび重なる国民党軍の攻撃を受けて多くの犠牲者を出し、また、食糧不足、移動中の悪条件により1935年10月に陝北に到着した紅軍は3万人に減少してしまっていた。

陝北ソビエト区の時代は1937年7月に日中戦争が始まるまでの1年10カ月であり、この時期の中国共産党は紅軍の兵力の恢復と陝北ソビエト区の勢力の拡大に努力をしていた時期である。

陝北ソビエト区に紅軍が到着した時の小学校は120しかなかったが、中国共産党は教育に力を入れていたので1937年春には320枚となり、在学児童は5,600人となった。陝北ソビエト区は財政的に困難な状態にあり、物質的にも制限を受けており校舎や設備についても多くの問題点があった。

教室として窑洞(山西省、陝西省に多い洞窟家屋)や民家を利用し、白墨の無い時は木炭や粘土で白墨まがいの物をつくり、筆記具、紙の無い時には砂盤(木の箱に砂を入れたもの)や木盤で字の練習をした。教科書の無い時には教科書をあてにせず、理解力と記憶力に依存する勉強を行なった。教師だけが教科書を持っていれば教育を行なうことは可能だった。机や椅子などは

問題にされなかった。教室がなければ野外で授業を行なった。⁽²¹⁾という様に陝北ソビエト区の教育の状況は最低であり、教育は中華ソビエト共和国臨時政府の時と同様であり、学校体育についても同様であった。

スポーツは紅軍の体力の向上と志気の高揚の手段として奨励されてはいたが、施設、用具ともに不足をしていた。紅軍は陝北ソビエト区に到着するとグラウンドを造り、各種の器具を整備していった。早朝の訓練は銃剣術、武装長距離走、障碍飛越等の軍事訓練が主であったが、夕方からは各種の球技を始めとしてスポーツ種目を行なっていた。卓球も盛んに行なわれていたが、ピンポン球が入手出来ないために木の球に穴を空けて空洞としたものを使用していた。⁽²²⁾卓球の用具の不足をこの様な方法で解決していたが、他の球技のサッカー、バスケットボール、バレーボールのボールも何らかの方法で代用出来るものを作製して使用していたのではないかと考えられる。

競技会は中華ソビエト共和国臨時政府時代と同様に各種の記念日に開催されていた。陝北ソビエト区での競技会は1936年甘粛省慶陽で開催の全軍運動大会が最初であり、次いで1937年5月1日の紅軍第1軍団の五一運動大会、5月30日の紅軍第15軍団の五卅運動大会がある。⁽²³⁾

注 (21) 前掲(16)書, 104頁。

(22) 前掲(19)書, 157頁。

(23) 前掲(19)書, 158頁。

5. 日 中 戦 争 期

1936年12月12日に起こった西安事件を契機として第2次国共合作が成立してソビエト区は辺区(解放区)と呼ばれるようになったのであるが、解放区が拡大し、学校教育、スポーツが盛んとなっていくのは1937年7月7日に始まった日中戦争以後であるので、本論文においては日中戦争以後を解放区として扱った。

日本軍の進撃は急で河北、山東、山西、河南、江蘇、湖北、安徽、浙江、広東の各省が日本の占領下に入ったが、全省をその勢力下に入れたのではなく、僅かに大都市を含む点と線を占領したか、省の一部を占領していたにすぎなかった。この日本軍の進攻により国民党軍の後退した空白地帯に共産党が進出していった。

また、太平洋戦争において日本が守勢にたった1943年後半から、その頹勢を挽回するために中国から優秀兵団の南方への抽出が続き、中国での日本の兵力は低下してゆきそれにとまって占領地、点と線の確保も困難となっていった。日本軍の勢力の後退した所には共産党が進出していった。

日本軍は点と線を確保する必要上たえず解放区に対して攻撃を行っていたが、1941年には解放区に対して激烈な攻撃を行ない大打撃を与えた。

I 解放区 の 教育

解放区の増加につれて各解放区に学校が設立されていった。その教育制度は中国共産党所在地の陝甘寧解放区の制度を準用していたが、中国共産党所在地の延安から遠く離れていた華中の蘇皖（江蘇，安徽）解放区は延安との連絡が困難なため別個の教育法令を公布していたが、陝甘寧解放区のものに近いものであった。

高等教育機関は陝甘寧解放区のみであり、他の解放区は小、中学校のみであった。

初等教育

陝甘寧解放区の「小学校法」「小学教育実施綱要」によれば、辺区小学校は辺区の国防教育宗旨と実施原則にのっとり民族意識、革命精神と抗戦建国に必要な知識と技能を培養するとなっていた。

小学校の修業年限は5年で、前の3年を初級小学校、後の2年を高級小学校とし、両者が設置されているのを完全小学校と称した。小学校は初級小学校が圧倒的に多かった。

小学校の教科目は国語、算術、常識、美術、労作、音楽、体育となっていた。⁽²⁴⁾

陝甘寧解放区の小学校は1937年秋に545校、児童数10,396人であったものが、1940年秋には1,341校、児童数43,625人となった。⁽²⁵⁾1,341校中何校が完全小学校であるかは不明である。

1940年に「義務教育条例」が制定されたが多くの問題点があった。⁽²⁶⁾

蘇皖区では初級小学校4年（地区により2年の短期小学校）、高級小学校2年（地区により短縮）、⁽²⁷⁾教科目は、初級小学校が国語、常識（1、2年は国語と常識を合わせて国常、常識には社会常識と自然常識）、算術、文娛（音楽、体育）、高級小学校は、国語、算術、政治常識、史地常識（史地は歴史と地理）、自然、文娛となっていた。⁽²⁸⁾

他の解放区も陝甘寧地区、蘇皖区の制度に良く似ていたものであったであろう。

中等教育

党と辺区政府は中等教育を重視してはいたが中等学校を設立しなくてはならないという根拠は初等教育その他に比較して薄弱だった。

陝甘寧区の中等教育は、1937年に魯迅師範学校、1938年に辺区中学を創設したが、どちらも修業年限は1年であり、短期訓練班的のものであった。1939年に両校は合併して辺区第1師範となった。所在地は延安。1939年秋に関中に第2師範、定辺に第3師範、慶陽に隴東中学が開設された。翌年に3校、1940年5月には綏徳師範と米脂中学が、1941年に鄜県師範学校が開設された。

中国老解放区の体育とスポーツ

これらの学校のうち米脂中学が3年制の初級中学であった外は隴東中学を含めて総てが2年制であった。これら学校の在學生は1940年から1941年にかけて1,400人余りであったので1校当りの在學生は多くはなかった。⁽²⁹⁾

1940年の後半に師範学校は初期師範は2年、後期師範2年と改められた。1944年には師範学校は3年になった。

師範学校の教科目は、

政治課（公民，哲学，時事を含）週2時間，全時数の100分の6。

専業課（国語，数学，歴史，地理，自然）国語週6時間，全時数の100分の22，数学週5時間，100分の15，史地と自然が各週2時間，100分の6となっており，専業課は週17時間，100分の55。

教育課（児童心理学，教育概論，教授法）週6時間前後，100分の26。

体音美課（体育，音楽，美術）週3～4時間，100分の19。

となっている。⁽³⁰⁾

陝甘寧区では小学校教育の充実を目標としていたので中等教育機関は師範学校がほとんどであり，中学校は2校に過ぎなかった。中学校の教科は，辺区建設，政治常識，国文，数学，史地（歴史，地理），生産知識，医薬知識となっていた。⁽³¹⁾

蘇皖区においては蘇皖区を7分区に分け1分区に初級師範学校を1校，中学校を2～3校を設立するとしていたが，予定通りにはいかなかった。

初級中学校3年（地区によって2年），高級中学校2年，初級師範学校3年（地区によって2年に短縮），高師範学校2年。⁽³²⁾

教科目は、

初級中学校一 国語，週6時間，数学，週4時間，農業知識と衛生（物理，化学と連同して）週4時間，化学常識，物理常識，民主政治，週4時間，歴史，週2～3時間，地理，週2時間，体育，週2時間，音楽，週2時間，美術，週1時間，時事研究，週2時間，青年問題，週2時間。

高級中学校一 国文，週6時間，数学，週4時間，自然（生物，物理，化学），週4時間，社会化学，週4時間，歴史，週2時間，地理，週2時間，民主建設，週4時間，体育，週2時間，音楽，週2時間。

初級師範学校一 政治課（歴史，地理を含），文化課（国語，数学，音楽，美術，体育），業務課となっており，政治課は100分の30，文化課は100分の30，業務課は100分の40となっていた。

高級師範学校一 初級師範学校に同じ。⁽³³⁾

高等教育

解放区に多くの知識青年が流入していったが，それに対して中国共産党中央は「大量吸収知

識分子」の決定をし高等教育機関の整備を行ない、また、拡大する解放区で指導的立場に立つ幹部を養成するための高等教育機関を設立していった。設立された学校はいずれも速成教育であった。

1937年8月1日に開設された抗日軍政大学の前身は1931年に設けられた中央紅軍学校で軍の幹部の養成を目的としており、他の国の士官学校に当るものである。修業年限7ヵ月。抗日軍政大学は各地に分校を設立していた。⁽³⁴⁾1937年11月1日に政治工作の幹部を養成する修業年限1年の陝北公学を延安に設立した。⁽³⁵⁾中国共産党は芸術工作を重視しており、その芸術工作の幹部を養成する魯迅芸術文學院（魯迅芸術学院とも称された）を1938年4月10日に延安に設立した。修業年限は9ヵ月。⁽³⁶⁾1939年7月20日女子の幹部を養成する中国女子大学を延安に設立した。修業年限は1年。⁽³⁷⁾八路軍衛生学校を1940年9月に中国医科大学に改め、医師の再教育と医師養成の学校とした。修業年限は2年。⁽³⁸⁾理工系の学校の自然科学院を1940年9月に延安に開設した。修業年限3年。⁽³⁹⁾

1941年9月22日に延安大学が陝北公学、中国女子大学、沢東青年幹部学校を合併して開学、1943年4月には魯迅芸術文學院、自然科学院も合併する。修業年限は行政関係2年、自然科学関係3年、魯迅文芸2年。⁽⁴⁰⁾1939年11月7日延安で開学した華北聯合大学は普察冀区の阜平に移動したが、阜平が日本軍の掃蕩にあい一時五台に移動した。修業年限1～2年。⁽⁴¹⁾

II 学 校 体 育

1938年に辺区政府の出した「学校で実行する軍事化の指示」で「体育課の中で軍事訓練を増加し、教師と学生は遊撃戦術を学び、抗戦教育の精神を体験させる」とあり、この線に沿って学校体育は行なわれた。⁽⁴²⁾

解放区の学校は軍事訓練を主とする体育を実施していたのであるが、解放区は国民政府軍、日本軍の包囲下にあったので体育用具は十分でなく、施設の整備も十分ではなかったと考えられる。

体育の授業の在り方については、小学校、中学校については何も示されておらず、中華ソビエト共和国臨時政府時代の指示を準用していたのではないだろうか。

師範学校については、

高級師範学校—1. 健身的柔軟体操、2. 自衛知識、3. 陸上競技および球技、4. 労働に代替出来る普通の体育的運動方法と鍛練法。

初級師範学校—1. 柔軟体操、2. 軍事基本動作、3. 陸上競技と球技の知識と技能、4. 民間体育の研究、5. 体育と生産の結合、6. 民衆体育の組織。

となっている。⁽⁴³⁾

高等教育機関の教科目には体育はなかった。

Ⅲ スポーツ

抗戦教育政策の第三に体育運動を広く発展させる。という項目があり解放区では身体鍛練のためのスポーツが重視されていた。⁽⁴⁴⁾

八路軍、新四軍の部隊の文化生活の第二は体育遊戯で、その中にバスケットボール、サッカー、バレーボール、陸上競技と各種の遊戯（日本軍を討つ、漢奸—裏切り者—を討つ等の遊戯）となっており、軍隊でもスポーツをとりあげていた。軍隊でスポーツをとり入れたのは、スポーツの訓練は軍隊訓練の重要な内容の一つとしており、スポーツ活動は体質を増強し、勇敢、機智、頑強な精神を培養し、かつ部隊の作戦能力を高めるとしている。⁽⁴⁵⁾

実施していた種目はバスケットボール、バレーボール、サッカー、野球、登山、鉄棒、体操、陸上競技、武術等となっているが、用具が不足しており種々の工夫をこらしてスポーツをしていた。

一つの例として野球をとりあげると、八路軍が野球をとり入れたのは野球は臂力の鍛練となるので手榴弾投擲の役に立つとしてである。しかし、用具の不足はいかんともしがたかった。ボールは布を強くまいてつくり、ベースには平板な石を使用し、グローブ、ミットは旧い軍帽や不用になった布靴を利用してつくって使用していた。⁽⁴⁶⁾

解放区は軍主導であったので学生、一般社会人も軍にならってスポーツを行っていたが、用具の不足から用具を必要としない種目が主として実施されていた。

1942年にはスポーツ指導者の養成を抗日軍政大学で始め、各種目のルールブックを印刷している。⁽⁴⁸⁾

スポーツ団体としては1939年に延安体育会が設立され、記念日の競技会、余暇時間や休日に行なう試合を管轄することになった。また、1942年1月25日に延安新体育学会が設立され、体育、スポーツに関する学術研究を行なうことになった。⁽⁴⁹⁾

解放区の競技会は各記念日に開催されており、中国共産党の勢力の拡大につれて解放区の安定度も増してゆき競技会の開催も多くなっていった。解放区においては冬季にはスケート、夏季には水泳が種目としてとりあげられていた。

解放区における最初の競技会は1939年5月4日～6日に開催された青年節競技会が最初である。この競技会の種目は陸上競技、バスケットボール、バレーボール、射撃、乗馬であった。

三八節（3月8日の婦人節）には女子だけの競技会が1940年から開催されるようになり、1943年2月には最初のスケート競技会が開催され、スピードスケートとフィギュアスケートが行なわれた。また、水泳においては武装渡河の種目も行なわれていた。

解放区で開催された最大の競技会は1942年9月1日～7日に開催された九一拡大競技会である。この競技会の参加者は男女合計1388名であり、成年男子、少年男子、女子の3組に分かれて行なわれ、競技種目は陸上競技、水泳、バスケットボール、バレーボール、射撃、手榴弾投擲、登山、障碍競走であり、他にエキジビションとして庭球、野球、サッカー、飛込、体操等が行なわれた。

(50)

解放区における競技会は陝甘寧区だけではなく、解放区の拡大につれて他の解放区においても実施されるようになっていった。

- 注 24 前掲(16)書, 106～107頁。
25 前掲(16)書, 104頁。
26 前掲(16)書, 107～108頁。
27 戴伯韜編「解放戦争初期蘇皖辺区教育」(1982年)人民教育出版社, 28頁。
28 前掲(27)書, 251～252頁。
29 前掲(16)書, 91頁。
30 前掲(13)書, 155～156頁。
31 前掲(16)書, 93頁。
32 前掲(27)書, 28～29頁。
33 前掲(27)書, 109～121頁。
34 曲士培著「抗日戦争時期解放区高等教育」(1985年)北京大学出版社, 35頁。
35 前掲(34)書, 71～72頁。
36 前掲(34)書, 81～84頁。
37 前掲(34)書, 146～148頁。
38 前掲(34)書, 148～149頁。
39 前掲(34)書, 150頁。
40 前掲(34)書, 115～121頁。
41 前掲(34)書, 142～144頁。
42 前掲(16)書, 107頁。
43 前掲(27)書, 116～179頁。
44 前掲(16)書, 53頁。
45 前掲(16)書, 75頁。
46 前掲(19)書, 186頁。
47 「体育文史」1984年3号, 人民体育出版社, 2頁。
48 前掲(19)書, 180頁。
49 前掲(19)書, 162～164頁。
50 前掲(19)書, 167～170頁。

6. む す び

1921年7月に結成された中国共産党は1924年の第1次国共合作により国民党と共に北伐を行っていたが、1927年4月の蔣介石の上海クーデターにより国共合作を解消し、1931年11月に江西省瑞金に中華ソビエト共和国臨時政府を樹立した。この政権の発展は国民党にとり脅威と

なった。そこで国民党1930年11月からソビエト区に数次にわたる攻撃を行なった。1933年10月から始まった第5次攻撃をもちこたえられずに1934年11月に瑞金は陥落し、共産党は西方への移動を行ない8つの省を通過して1935年10月に陝西省北部に達し延安を新首都とした。

国民党は共産党攻撃の方針をかえなかったが、1936年12月12日に西安事件が起こり、その結果第2次国共合作が成立した。

1937年7月に日中戦争が起こり、日本軍の攻撃により国民党軍が後退して生じた空白地帯に共産党が進出してその勢力を発展させていった。国民党は共産党の勢力の発展に不安を感じ、しばしば反共作戦を展開していった。また、日本軍は共産党の根拠地にたえまなく攻撃を行っていた。

共産党統治地区の学校体育、スポーツについてみると、

中華ソビエト共和国臨時政府地区は就学率の低い地域であり学校の設立が急務であり、「中華ソビエト共和国小学制度暫行条例」、「小学課程教則大綱」を公布し、前期3年、後期2年の5年制の小学校制度を定めた。

当時の共産党地区は国民党軍の包囲下であり教材は不足し学用品にもことかく状態であった。

中等教育は3カ月から1年の速成教育であった。

学校体育も施設用具が十分でないという状況下にあったので、用具を使用しない種目を教材とせざるをえなかったのもので、体操、陸上競技、登山等が行なわれた。

スポーツは身体鍛練の手段として奨励されてはいたが、体育の教材さえ不足するという国民党の包囲下ではスポーツは用具を必要としないものにならざるをえず、また、球技に使用するボールも手造りせざるをえなかった。

競技は記念日の行事として行なわれており、競技種目は陸上競技、球技、軍事種目であった。最初の競技会は1933年5月30日に開催されている。

陝北ソビエト区の時代は1935年10月から1937年7月に日中戦争が始まるまでの1年10カ月の期間であり、大きな犠牲を払った大長征後の勢力の回復期であり勢力の拡大に努めていた時期である。

学校の設立にも力を入れていたが国民党軍の包囲下であり総ての物資は不足しており、学用品も例外ではなかった。学校体育も中華ソビエト共和国臨時政府の時と同様であった。

スポーツは体力の向上と志気の高揚の手段として奨励されてはいたが、施設、用具ともに不足していた。用具の不足は独自の方法で解決をして行っていた。競技会も各記念日に実施していた。

日中戦争の初期には共産党地区は未だ苦境に立っていたが、1943年の後半からは解放区の増

中国老解放区の体育とスポーツ

大につれて安定していった。学校も速成教育から正規の教育年限へと延長されていった。

日中戦争にともない学校体育は軍事訓練を主とするものを実施することになり、それにともない教科にも軍事的項目が多くなっていった。

抗戦教育政策に体育運動を広く発展させるという項目があり、身体鍛練のためのスポーツを重視していた。軍隊においてもスポーツの訓練は軍隊訓練の重要な内容の一つとしてとりあげて実施していたが、軍事に直結する種目が重視されていた。用具の不足から用具を使用しない種目が多く行なわれていたが、夏には水泳、冬にはスケートも行なわれた。

競技会は1939年5月に最初の競技会が開催されて以降記念日ごとに競技会も開催されるようになり、体育団体も設立された。

本研究で取り扱った中華ソビエト共和国臨時政府の根拠地瑞金は国民政府軍攻撃により1934年10月に放棄されており、また、陝北ソビエト区、陝甘寧解放区の首都延安も太平洋戦争後の国共内戦により1947年に国民党軍に占領されており当時の資料の多くは亡失してしまっており、本稿も入手可能な資料によらざるをえなかった。

附 記

本稿は昭和61年度慶應義塾学事振興資金に依る研究である。